



ISSN 2432-9576

ENSG No.9 2024年12月発行

ENSG

(Ethnicity, Nation, State, and the Globe)

No.9

エスニック・マイリティ研究 第9号

エスニック・マイリティ研究会 2024年12月

『エスニック・マイノリティ研究』第9号

目次

エッセイ等

●研究滞在記2024チェコ

——森下 嘉之——p.7

●短文：ロマニ語と共通するネパール語の語彙について

——角田 延之——p.9

●ピケティ『21世紀の資本』における可視化

——松岡 格——p.15

会員近況——————p.17

執筆者一覧・編集後記——p.19

エッセイ等

研究滞在記 2024 チェコ

森下 嘉之

筆者は 2024 年度（2024 年 4 月～2025 年 3 月）において、勤務先より 1 年間のサバティカル（学外活動）の機会を頂き、チェコ共和国（以下、チェコ）プラハのアカデミー歴史学研究所（Historický Ústav Akademie věd České Republiky）に所属している。本稿では、僭越ながらこの度のサバティカル滞在記をもって、近況報告に代えさせていただく。

筆者は大学院在学中に初めての海外長期滞在をチェコ・プラハにて経験し（2004～2007 年）、以降も度々チェコを訪れているが、今回二度目の長期滞在の中で改めて感じた最も大きな変化は、やはり物価の大幅な上昇である。最初の留学時は、1989 年のベルリンの壁崩壊から 15 年程度の時期であり、チェコをはじめとする旧東欧社会主義諸国の生活費は大まかに言って日本の半分以下という印象であった。しかし、コロナ禍及びウクライナ戦争を経た 2024 年の滞在時には、生活費は日本と同等以上という感覚である。これも印象論であるが、今のチェコの飲食費がコロナ禍前のドイツやオーストリアなど「西側諸国」の価格にかなり近づいている一方、西側ユーロ圏の値上がりも著しいため、「西側諸国」に比べればチェコの物価は相対的にまだ安価ということになる。いずれにしても、以前に日本で抱かっていたような、安く旅行・生活ができるという感覚はほぼなくなっている。

プラハで特に深刻なのは住宅難と家賃の上昇である。筆者は幸いにして、アカデミー提携の宿舎を借りることができたが、一般に同市内の不動産で部屋を探す場合、最低でも日本円で 15 万円近い家賃（約 2 万チェココルナ）を覚悟しなければならないようである（現地研究者によれば、ベルリンよりも高いとのこと）。同国で住宅難は長らく政治問題化しており、2024 年 9 月には大臣の更迭と政権危機が引き起こされるまでになっている。このような状況にもかかわらず、プラハの街では再開発・建設ラッシュなどに伴う雇用増と低い失業率のため、商業施設や飲食店などは変わらぬ賑わいを見せており、生活苦の悲壮感などはあまり感じられないように見える。

筆者の最初の滞在時期は、チェコが EU に加盟した時期であったが（2004 年）、その後の 20 年間で制度的な変化も見られた。例えば長期滞在ビザ（査証）については、2024 年現在では現地の内務省が発行する「滞在許可証 povolení k pobytu」カードの所持によって、パスポート貼付けのビザに代えられている。このカードには、個人情報に加えて指紋などの生体認証が埋め込まれており、EMS 研究会でも取り上げた、『生体認証国家』（キース・ブレッケンリッジ著）を想起させる。おそらくは EU 各国で共通のフォーマットにより作成されているものと思われるが（チェコでは一般に「市民証 občanský průkaz」と呼ばれる）、EU 内の国境を越える際には、市民証を所持していても外国人は従来通りパスポートの携帯が義務付けられている。また、2025 年 1 月からは英国において、日本国籍者は有料での ETA（電子渡航認証）の申請が入国前に義務付けられることになっており、その後は EU 諸国にも ETIAS（欧州渡航情報認証制度）として導入されるとのことである。2025 年以降に欧州に渡航する際

には注意が必要である。

本稿執筆の時点（2024年12月）でサバティカルはまだ終わっていないので、研究の進捗について記すのは多少憚られるが、現時点での忘備録という面から述べておきたい。今回の滞在で筆者は、プラハ市文書館をはじめとする国内各地の文書館で、主に冷戦後期にあたる1970-80年代、社会主義体制下の同国の住宅団地の建設政策についての史料を渉猟している。文書館は国内市内に点在しており、例えば筆者が訪れた「大統領官房文書館」（社会主義期の住民からの苦情などが収められている）は、プラハ城内大統領府に隣接した場所にあるため、入館の際にはセキュリティチェックを受けたうえで、文書館員の付き添いのもとで立ち入ることができる。このテーマは現在のチェコでは、建築史や社会学で多くの研究蓄積があり、歴史学においても社会主義体制への評価、さらには体制転換と1990年代以降の新自由主義への移行という観点から着目されている。また、上記のテーマと関連して、戦後社会主義体制下でのチェコとドイツの国境地域の入植開発政策についても、史料文献の収集に努めている。また、研究所では興味深い国際セミナーやイベントが何度か開かれており、そうした際にはこの機会になるべく足を運ぶようにしている。筆者が参加した、EMSにも関係がありそうなセミナーについていくつか紹介しておきたい。

- ・ 「コミュニティの名づけ—公式・非公式の名づけを通した、中東欧におけるアイデンティティ再構成 Naming the Community: Identity Reconfiguration in Central and Eastern Europe through the Prism of Official and Unofficial Names」（チェコ民俗学研究所、2024年5月16-17日）
<https://www.eu.avcr.cz/cs/aktuality/Naming-the-Community-Identity-Reconfiguration-in-Central-and-Eastern-Europe-through-the-Prism-of-Official-and-Unofficial-Names/>
- ・ 「18-21世紀におけるエスノ言語的な地図作成の比較研究—ジャンル、政治対立、記憶 Ethnolinguistic cartography (18th–21st centuries) in comparative perspective: genre, political conflicts, memory」（チェコ歴史学研究所、2024年10月14-15日）
<https://www.hiu.cas.cz/udalosti/ethnolinguistic-cartography-18th-21st-centuries-in-comparative-perspective-genre-political-conflicts-memory>

最後に、文書館に何度も通って史料の調査収集を行うことは、歴史研究者にとって最も重要な作業であり、醍醐味であるが、帰国後もこのスタイルを継続することはおそらく困難である。多くの西洋史研究者が直面する問題であるが、業務負担と資金難に加え、大学研究者が最も時間の取れる夏季休暇期間がちょうど現地の文書館の夏季休業期間と重なることから、文書館史料の閲覧入手があまり期待できないためである。文書館以外の研究手法をいかに構築していくかが、これからの課題となる。

短文：ロマニ語と共通するネパール語の語彙について

角田 延之

はじめに

以下で書かれることは、専門家の間では既知のことである。筆者は現在、ネパール語のネイティブと日々接している。そのためネパール語を含むインド系言語に興味を持ち、学習中である。そこで、ロマニ語と共通する語彙を多数確認したため、何かに益することもあるかと思い、本稿の執筆を思い立った。図書館や web で、辞典等を突き合せれば確認できる内容ではあるが、本稿は、筆者の本誌への近況報告に代えて、記すものである。

1 ロマニ語について

以下、角悠介著『ニューエクスプレス：ロマ(ジプシー)語』(2018)から、ロマニ語について説明する。

ロマニ語は、ジプシーという名で知られる人々の用いる言葉である。ジプシーはロマとも呼ばれ、ロマが使う言葉を専門家はロマニ語と呼んでいる。この語は、インド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派インド語群に含まれている。この語群には数多くの言語が含まれている。サンスクリット語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語は有名であろう。ネパール語も、この語群に属する。

本稿に関わりがある点は、ロマニ語の語彙には中期インド語起源のものが 800 以上含まれている、という点である。800 には遠く及ばないが、学習中のネパール語に、ロマニ語と共通の語彙(と思われるもの)があるので、確認できたものを以下に列挙したい。中期インド語はネパール語を含む現代のインド系言語に繋がるものなので、無関係ということもないかと思われる。なお、本稿でのロマニ語は、異なるロマニ語の方言話者間で文語もしくは共通語として用いられている標準ロマニ語のことであり、角の上掲書が取り扱っているものである。語彙も、同書に出てくるものである。同じインド語群に属する言語に共通の語彙があることは少しも不思議なことではなく、むしろ当然のことではある。しかし、具体的にどの語彙が共通しているかを確認することで、何らかの示唆があるものと筆者は考える。

2 ロマニ語と共通するネパール語の語彙

推＝角田の推測

現ペ＝現代ペルシア語

現ギ＝現代ギリシア語

ロマニ語の動詞は三単現（三人称単数形現在形）。ネパール語の動詞は不定詞。

ロマニ語・読み・意味	ネパール語・読み・意味
akana・アカナ・今(推)	अहिले・ahilē・アヒレ・今 (現ペ・اکنون・aknoon・今)
anglal・アングラル・～の前に(推)	अगाडि・agāḍi・アガリ・～の前に
avel・アヴェル・来る(推)	आउनु・ā'unu・アウヌ・来る
berś・ベルシュ・年	वर्ष・varṣa・ヴァルサ・年
beśel・ベシエル・住む/座る	बस्नु・basnu・バスヌ・住む/座る/泊まる
bori・ボリ・嫁(推)	बुडी・buḍī・ブリ・嫁
čhon・チョン・(年月の)月	जून・jūn・ズン・(天体の)月 चन्द्रमा・candramā・チャンドラマ・同上 (年月の月は महिना・mahinā・マヒナ)
ćirikli・チリクリ・鳥	चरा・carā・チャラ・鳥
ćumi・チュミ・キス ćumidel・チュミデル・キスをする	चुम्बन・cumbana・チュンバン・キス चुम्बन गर्नु・cumbana garnu・ チュンバungalヌ・キスをする
daj・ダイ/dej・デイ・母(推)	दाई・dā'ī・ダイ・兄 (母は आमा・āmā・アマ) (現ペ・دايي・dayee・母の兄または弟)
deś・デシュ・(数字の)10	दस・das・ダス・(数字の)10 (現ペ・ده・dah・(数字の)10)
dīves・ディヴェス・日(推)	दिन・din・デイン・日
duj・ドゥイ・2	दुई・duī・ドゥイ・2 (現ペ・دو・do・2)
dukh・ドゥク・痛み	दुखाइ・dukhā'i・ドゥカイ・痛み
dur・ドゥル・遠くに/遠い(推)	टाढा・tāḍhā・ターラ・遠い (現ペ・دور・door・遠い)
efta・エフタ・7(推)	हप्ता・haptā・ホプタ・週 (7は सात・sāt・サート) (現ペ・هفته・hafteh・週。هفت・haft・7) (現ギ・εβδομάδα・evdomáda・週。επτά・eptá・7)
gav・ガヴ・村	गाउँ・gā'um̐・ガウン・村
gilavel・ギラヴェル・歌う(推)	गीत・gīta・ギート・歌 गीत गाउनु;・ギートガウヌ・歌を歌う
grasta・グラスタ・馬(推)	घोडा・ghōḍā・ゴラ・馬
gudli・グドリ・甘い/優しい	गुलियो・guliyo・グリヨ・甘い (優しいは दयालु・dayalu・ダヤル) (現ギ・γλυκός・glykós・甘い)
i3・イヂ・昨日(推)	हिजो・hijō・ヒジョ・昨日

jag・ヤグ・火	आगो・āgō・アゴ・火
jakh・ヤク・目	आँखा・ākhā・アカ・目
jekh・イエク・1	एक・ek・エク・1 (現ペ・نک・yek・1)
kaj・カイ・どこに?/どこへ?(推)	कहाँ・kahā・カハ・どこ? (現ペ・کجا・koja・どこ?)
kalo・カロ・黒	कालो・kālō・カロ・黒
kan・カン・耳	कान・kāna・カン・耳
kèci・ケツイ・どれほどいくつ(推)	कति・kati・カティ・どれほどいくつ
kher・ケル・家	घर・ghara・ガル・家
kinel・キネル・買う	किनु・kinnu・キンヌ・買う
kiralal・キララル・チーズ(推)	घ्यू・ghyū・ギユウ・バターオイル(のようなもの) (バター(のようなもの)は नौनी・naunī・ノウニ) (チーズは चिजा・chija・チザ) (現ペ・کره・kareh・バター)
kon・コン・誰?(推)	को・ko・コ・誰?
kraj・クライ・王様(推)	राजा・rājā・ラザ・王様
liel・リエル・取る(推)	लिनु・linu・リヌ・取る
lon・ロン・塩(推)	नुन・nuna・ヌン・塩
mami・マミ・祖母(推)	मामा・māmā・ママ・母の兄または弟 (祖母は हजुरआमा・hajuraāmā・ハズラマ)
manuš・マヌシュ・人間	मानव・mānava・マナヴァ・人間
merel・メレル・死ぬ	मर्नु・marnu・マルヌ・死ぬ
muj・ムイ・口/顔	मुख・mukha・ムカ・口 (顔は अनुहार・anuhāra・アヌハル)
murš・ムルシュ・男性(推)	पुरुष・puruṣa・プルス・男性
oxto・オフト・8	आठ・āṭh・アータ・8 (現ペ・هشت・hasht・8) (現ギ・οκτώ・októ・8)
pani・パニ・水	पानी・pānī・パニ・水
pan5・パンヂ・5	पाँच・pāc・パンチャ・5 (現ペ・پنج・panj・5) (現ギ・πέντε・pénte・5)
pazàri・パザリ・市場(推)	पसल・pasala・パスアル・店 बजार・bajāra・バザール・町/市場 (現ペ・بازار・bazar・市場)
piel・ピエル・飲む	पिउनु・piunu・ピウヌ・飲む

	(現ギ・πίνω・pino・飲む)
rāt・リャト・夜	रात・rāta・ラタ・夜
sa・サ・全て/全てを(推)	सबै・sabai・サバイ・全て
sap・サブ・蛇	सर्प・sarpa・サルパ・蛇
sar・サル・どのように(推)	कसरी・kasarī・カサリ・どのように
sikavel・シカヴェル・示す/教える(推)	सिकाउनु・sikāunu・シカウヌ・教える (示すは देखाउनु・dēkhā'unu・デカウヌ)
sundal・スンドル・世界(推)	संसार・sansāra・サンサーラ・世界
šov・ショヴ・6	छ・cha・チャ・6 (現ペ・شش・shesh・6)
śunel・シュネル・聞く	सुनु・sunnu・スンヌ・聞く (現ペ・شنين・shanee-dan・聞く)
tato・タト・熱い/暑い	तातो・tātō・タト・熱い (暑いは गर्मी・garmī・ガルミ) (現ペ・گرم・garm・熱い/暑い)
telal・テラル・～の下に(推)	तल・tala・タラ・下
than・タン・場所	ठाउँ・thā'um̄・タウン・場所
thud・トゥド・ミルク	दूध・dūdha・ドゥダ・ミルク
tiri・ティリ・君の(推)	तिम्रो・timrō・ティムロ・君の
trin・トリン・3	तीन・tīn・ティン・3 (現ギ・τρία・tria・3)
vast・ヴァスト・手/腕/手のひら(推)	हात・hāta・ハータ・手/前腕 上腕は पाखुरा・pākhurā・パクラ 手のひらは हत्केला・hatkēlā・ハトゥケラ (現ペ・دست・dast・手)
vorbil・ヴォルビル・話す(推)	बोल्नु・bolnu・ボルヌ・話す
ʒal・ヂェアル・行く(推)	जानु・jānu・ザヌ・行く
ʒvipen・ヂヴィペン・人生/命/生きること	जीवन・jīvana・ジヴァン・人生/命/生きること

以上は、筆者が記憶しているネパール語の語彙の中から、ロマニ語と共通していると思われるものを抜き出して作成した。語彙の確認および入力のために、Google 翻訳を用いている。その上で、ネパール語の列はネイティブにチェックしていただいた。ネパール語は学習中の言語であるため、リストの語彙は今後、増減する可能性がある。筆者にロマニ語の知識がないため、ロマニ語の列にはミスがあるかもしれない。(推)は筆者の推測による選出だが、他にもあるかもしれない。上記は、あくまでも筆者が共通していると考えている語彙であるため、実は関係がない可能性も大いにある。現代ペルシア語や現代ギリシア語、あるいは両方、を併記した語彙もある。歴史的に、ロマニ語はペルシア語にもギリシア語にも影響を受けてきたため、共通している、という場合、インド系言語と共通しているというべきか、それともペルシア語やギリシア語と共通しているというべきか、分からない場合もある。併記はそのような場合

に行った(インド系言語もペルシア語の影響を受けている。それは、ガズナ朝(955-1187年)によるインド侵攻以降本格化した、インドのイスラーム化という歴史的経緯による。角の上掲書によれば、ロマの先祖も、同ガズナ朝のマフムード(971-1030年、在位 997-1030年)によるインド北部の都市カナウジへの侵攻(1018年)により、故郷を追われ、放浪の旅を開始した)。ロマニ語と同じく、筆者に現代ペルシア語や現代ギリシア語の知識はなく、上記は、web や学習書を駆使して作成したものである。ロマニ語の辞典を調べれば、語彙の起源を知ることができるのであるが、今回は近況報告代わりに短文ということで、あえて調べていない。

出典

ロマニ語に関して

角悠介『ニューエクスプレス：ロマ(ジプシー)語』白水社、2018年。

現代ギリシア語に関して

木戸雅子『ニューエクスプレス：現代ギリシア語』白水社、2016年(第三刷。第一刷 2012年)。

現代ペルシア語に関して

浜畑祐子『ニューエクスプレス+：ペルシア語』白水社、2018年。

竹原新、ベヘナム・ジャヘドザデ『世界の言語シリーズ 15：ペルシア語』

大阪大学出版会、2020年

Sulayman Hayyim NEW PERSIAN-ENGLISH DICTIONARY

<https://dsal.uchicago.edu/dictionaries/hayyim/>

その他、文字入力のために主に Google 翻訳を使用した。

最後に、本テーマに関する必読かつ最重要文献の一つとして、以下を挙げさせていただきたい。

左地亮子『現代フランスを生きるジプシー—旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』

(第 39 回サントリー学芸賞受賞作品) 世界思想社、2017年。

謝辞

आदरणीय सम्पूर्ण नेपाली विद्यार्थीहरू । तपाईंको सहयोगले, मैले यो लेख लेख्न सक्छु । मुरी मुरी धन्यवाद ।

(ネパール人学生の皆さん。皆さんのおかげで、この文を書くことができました。どうもありがとうございました。)

ピケティ『21世紀の資本』における可視化

松岡 格

昨年ピケティ (Thomas Piketty) の著書『21世紀の資本』『資本とイデオロギー』を読んだ。もともとは「イデオロギー」ということばが気になって読んでみたのだが、実際読んだところ、意外にも現在筆者が研究上で関心を持っている「可視化」「可視性」に関わる話が複数出てきた。

これらの著作ではどのような可視化、可視性が問題とされているのか、本誌上で紹介する。時間の関係で、今号ではまず主に『21世紀の資本』(山形浩生訳、みすず書房、2014)について述べることにする。

ピケティがこれらの著作で論述の対象としているのは、いわゆる格差の問題である。彼が具体的に問題としているのは世界の経済格差である。その格差をふまえ、貧しい人々を救い、諸国民の幸福を追求するためには何をすべきか。

ピケティはこれらの著作において、世界の一部の国(「富裕国」)、特にそうした国の特定の個人(民間企業の経営者、資産家)というトップに集中する資本の偏り(富の偏在)を指摘し、より公平な経済的な分配(もしくは、不均等な分配の克服)を実現することを主張しているが、そのために世界レベルでの財務透明性を実現することの重要性を説いている。具体的には富裕者への課税、累進所得税に加えて、民間企業の財務・資産状況を透明化し、累進資本税を課すことで格差削減を図るべきである、としている。ピケティが上掲書で求めている可視性とは、このような財務透明性、という意味での可視性である。以下、具体的にいくつかとりあげて紹介する。

ピケティがこれらの本で示している主たるデータや歴史的事例は主に西欧のものであるが、議論の各所で他の国もとりあげている。例えば中国について、石油輸出のない中国などの新興国が急成長しているのは確かだが、先進国に追いついたところで急成長は止まる、均等化のプロセスでキャッチアップすれば個別の急成長は鈍化する、と述べている(ピケティ、2014: 478-480)。また中国の政府系ファンドの資産と中国銀行の準備金を合わせても、富裕国の資産に比べればわずかな額である(ピケティ、2014: 480-482)、とも述べている。中国を含む新興国の現状が人々に与えるインパクトと比して富裕国の富がかすんで見えるように見える。しかし、ピケティによれば、一見富裕国が貧しくなっているように見えるのは、世界の金融資産の大きな部分がタックス・ヘイブンに隠されていて、可視化されていないから(ピケティ、2014: 482-485)、であった。先進国の資産は十分可視化されているように見えるが、実はそうではなくて、その意味での可視化は決して十分ではない。そうした隠された資産を含め

てデータをとりなおせば、諸国の資産保有状況の見え方は一変し、富裕国の優位性が改めてクローズアップされることを、ピケティは示した。

この意味での可視化というのは進展するのみに思えるが、ピケティはそうではないことも示している。情報透明性が後退することもあるのである（ピケティ、2014：341）。例えばインドは1922年以來公開してきた所得税データを2000年代初頭に発表をやめてしまった。そのためトップ所得の推移調査は困難となった。

上掲『21世紀の資本』でピケティは、世界経済の現状や格差の問題（「不平等スパイラル」）をふまえて、資本に対する世界的な累進課税の導入を提案し、それを高水準の国際金融の透明性と組みあわせることが重要である、と説いている（ピケティ、2014：539）。資本税の導入には金融的な透明性が必要としているが、それに関する説明で「誰が世界中でどんな資産を持っているかが明確になっている必要がある」と述べている（ピケティ、2014：543）。資産保有状況を可視化して、誰にどの程度、またどの程度累進的に課税すべきなのか、確定する必要があるということだろう。この資本税（例えばすべての資産に対して年率0.1%の一律税率をかける）というのは現時点では絵空事に思えるが、歴史をたどれば、例えばフランス革命という政治的試みによって資産の申告義務付けと地籍測定ということを実現したという事例があるのだから、実現不可能ではないだろう、と説く（ピケティ、2014：544-545）。今後は、資産の合法的な所有者とみなされるためには、所有している資本・資産を当局に申告する義務を果たすことが当然視される、と世界が合意すれば資本税の導入は可能である、ということだろう。

注意が必要なのは、ピケティは個人の所得や富自体には関心がなく、それらに対する透明性は重要ではない、と明言していることである。彼が求めているのは民間企業・政府の銀行口座情報の公開、国際的な民間企業の銀行データの共有、である（ピケティ、2014：600）。逆に言えば、企業の利益を守るために個人の情報が危機にさらされているとしたら、彼はそれを支持しているわけではない、ということである。可視化という観点からすると、このような点が注目される。この議論は透明性至上主義ではない、ということである。単になんでも可視化すればよい、という議論は議論として単純であるし、おそらく社会に持ち込んだ時にも問題を解決するどころか、新たな問題を持ち込む可能性もある。

ピケティのこの本は可視化について議論した本ではなく、以上はあくまでも可視化という観点から上掲書のいくつかの記述を取り出して紹介、コメントしたものに過ぎない。しかし、広くいえば世界の可視化を求める、現代における強力な言説の一つとしてとらえることも可能であろう。

会員近況報告

今号では会員近況報告欄を休止いたします。

執 筆 者 一 覧

角田 延之 長崎外国語大学外国語学部特別任用講師

森下 嘉之 茨城大学人文社会科学部准教授

松岡 格 獨協大学国際教養学部教授

編 集 後 記

まず今号に文章を投稿して下さった皆様、誠にありがとうございました。通常号の月号（9号）に収録できた内容はわずかになりましたが、それぞれが、現在の世界の現状を端的に切り取ったものになっている気がいたします。

今年は第8号を特別号として、『多様性を読み解くために』の第2弾を刊行しました。そちらには会員外の方のものも含めて、多様性に関わる多彩な文章を掲載しております。各文章は教材としても使えるようになっています。機会がございましたら是非そちらもご覧ください。

（松岡 格）

ENSG (Ethnicity, Nation, State, and the Globe) No.9

エスニック・マイノリティ研究 第9号

発行:2024年 12月 31日

ISSN 2432-9576

編集委員(名字五十音順)

遠藤嘉広、JA 日下、栗林大、香坂直樹、辻河典子、森下嘉之、松

岡格(編集長)

発行所:エスニック・マイノリティ研究会

〒340-0042 埼玉県草加市学園町 1-1

獨協大学国際教養学部 松岡研究室内

URL: <https://academic-circle-study-ensg.net/>

ENSG に掲載された論文等の著作権は著者と編集委員会がともに保持する。無断転用・転載を禁じる。
Copyright ©2024 by individual author and ENSG Editorial Board. All Rights Reserved. This material may not be published or reproduced without permission.